

夕方。学校の授業を終えた僕は、ある建物を  
目指して走っていた。やがてそれが見えてくる。  
全体的に外壁が薄くすすけている、一階建ての  
どこか寂れた工場。

閉じられた正面シャッター横のドアを開け  
て、当然のように中に入る。途端にけたたまし  
い機械の音が耳をつんざく。外からの印象とは  
違い、中は活気に溢れていた。揃いの作業服に  
身を包んだおじさん達が、それぞれの機械の前  
に立ち仕事に励んでいる。

僕も空いた機械の前まで行き、鞆を置いて電  
源を入れる。

「お！おかえりなさい、ぼっちゃん！今日は早  
かったっすね？」

隣の機械担当のおじさんが僕に気づいて声  
をかけてくれる。

「ただいま、今関さん。…百でいいんだよね？」  
「ええ、そうっすけど…でもいいんすか、毎日手伝ってもらっちゃって？ぼっちゃんには学業っていう大事な仕事があるわけじゃないすか…」

「いいの、いいの。少しでも手伝いたいんだよ、工場のために。僕…この工場好きだから」  
「ぼっちゃん…。すんません、恩に着るっす」  
「うん！全然いいよ！」

僕は慣れた手つきで所定の位置に金属の塊をセットしていく。ここは、自動車やバイクなんかの部品を作る、小さな工場だった。社員は全部で七人しかいない。みんな、気の良いおじさんばかりだ。

そして工場長兼社長が、僕のお父さんなのだった。家族経営みたいなもので、お母さんも事務や経理担当として働いている(ちなみに事務

員はお母さん一人。女性社員もお母さんだけだった。さらには僕や妹も、放課後や土曜日なんかにこうしてお手伝いしているというわけだった。

ちなみに妹はお小遣いをもらわない限り滅多に動かないけど、僕は違った。暇さえあれば工場にでて、仕事を手伝っている。今ではほぼ全ての工程を、一人で問題なくこなせるまでになっていた。

さつき今関さんにも言ったように、僕はこの工場が大好きなのだ。お父さんが動かし、お母さんが支え、僕と妹が手伝う家族の工場……。社員のおじさん達もみんな良い人ばかりで、ほとんど家族みたいなものだ。

両親には反対されていたけど、僕は卒業したらここに正式に就職したいと思っていた。そして、いずれはお父さんの後を継ぎたいと……。

家族の大切な工場を、僕がずっと守っていき  
たいと…。

（…よし！今日もバリバリ働くぞ！）

※※※

「今関さん、ごめんね。あとよろしく。それじ  
やあ、あがります」

「はい！ご苦労さまつす、ぼっちゃん！どうも  
ありがとうございます！」

今関さんに後を任せ、僕は機械の前を離れた。  
本当はもう少し働きたかったけど、社員さん達  
にいらぬ心配をかけることにもなりかねない。  
今関さんにも言われたように、僕の本業は学生  
なのだ。明日の授業に支障がでてはいけないし、

今日の復習も少ししたかった。

工場の奥は居住スペースにつながっており、そこが僕達家族の家になっていた。だから僕はそちらに向かって歩いていったのだけれど、ふとあることが気になり、急に反対側、工場正面入り口近くに位置する事務所を振り返った。

そういえば、今日はお父さんもお母さんも工場にでてこなかった。二人とも現場の担当ではないけれど、なにかしら用があって一度は顔を見せるのが常なのだ。

二人はずっと事務所にいたのだろうか。なんだか違和感を覚え、僕は小走りで事務所の前まで行くと、ドアを少しだけ開けて中を覗いてみた。

予想通り、二人は中にいた。お父さんはデスクの椅子に座り、その脇にお母さんが立っている。

お父さんは小柄で細身だがやや強面で、威厳のようなものをちゃんと感じさせる、僕にとっては少し恐い存在だった。今年で五十歳になる。社員さん達と同じ制服の作業着姿だった。

一方のお母さんは、事務員用の制服に身を包んでいた（事務員は現在お母さん一人だけど、今後増えた時のためにと制服は正式に用意されていた）。白のブラウスにチェック柄のベスト、下はタイトめの黒スカート。いかにも事務員然とした装いで、家にいる時の優しいお母さんと違いとてもカッコ良く見えた。四十三歳。長い黒髪を後ろで束ねただけのシンプルなポニーテールで、全体的に地味で年相応のどこかくたびれたような雰囲気があるけれど、それは仕事も家事もこなし、懸命に家族を支えてきてくれた証拠に他ならないだろう。

二人はどこか深刻な様子で話をしていた。

「だから…なにかとんでもない無茶を言われるってことも頭に入れとかないといけないんだ…」

「でも…それに応えるしかないわけでしょ？」

…だったらもう覚悟を決めるしか…」

「簡単に言うなよ…そりやお前の立場なら言えるだろうけどな…俺には責任があるし…色んなことを考えないといけないんだから…」

「そんな言い方ないじゃないの…私だって考えてるわよ…」

なにを話しているのかはわからなかったけど、僕は二人の間にとっても険悪な空気を感じ取っていた。すごく嫌な気がした。両親はこのところ、こうして不機嫌そうに言い合っていることがよくあった。

昨今の不景気、そして製造業の宿命的な窮状の話は、少なからず僕の耳にも入ってくる。工

場の経営面についてはさすがに僕も詳しくなかったけれど、その辺りがあまりうまくいっていないのだろうか。なんかそんな気がした。

少しでも二人の力になればと思い、僕は事務所のドアを開けて両親に声をかけた。

「：お父さん：お母さん：なにか困ってるの？：僕に出来ることがあるならなんでもするよ？」

「明隆：いたのか：いや：これはお前には関係ない話だ：今日はもう家に帰ってなさい」

「待って、あなた。工場に関する話は、もう明隆だって無関係じゃないわ。毎日あんなに手伝ってくれてるんだから」

「でもなあ：息子に負担をかけるわけには：」

「いいんだよ、お父さん。なんでも言つてよ。

僕、絶対二人の力になるからさ」

「そうか：すまん：」



とても心苦しそうにしながらも、お父さんは聞かせてくれた。それはやはり、工場の経営にまつわる話だった。

なんでも、この工場の仕事ほとんどの元請けであつた得意先の会社が、別の会社を買収されたのだという。それに伴い当然経営陣も一新され、これまでの事業全てが具に見直されることになった。必然的に、この工場との既存の契約や新規の発注も、変更されてしまうかもしれないというわけなのだった。

「…え…でも…仮にその会社から仕事をもらえなくなつたとしても…また別の会社から仕事をもらえば…大丈夫…なんだよね…問題ないんだよね…工場は？」

「…いや…すまんが…そう簡単な話でもないんだよ…」

うちは、本当に小さな下請け工場である。な

にもしなくても勝手に仕事が舞い込んでくるというわけでは決してない。ほぼ唯一の得意先であるその会社から仕事をもらえなくなれば、厳しいこのご時世、最悪の事態ということも考えておかねければならない。お父さんはそう言っただ。

「そんな…」

僕は慄然としていた。

工場が…潰れてしまうかもしれない。

僕の大好きな…家族の工場が…。

「…ゴクッ」

目の前が真っ暗になる思いだった。世間知らずの僕は、工場がそもそもそんな危うい状況に置かれていたということ自体、想像すらしていなかった。

「で、でもね。なににもまだ決まったわけじゃないのよ、契約を打ち切られるって。全然大丈夫

だつてことも充分ありうるんだから、そんなに心配しないでね、明隆」

「お母さん…」

僕の工場愛を知っているお母さんが、息子を安心させるように言ってくれる。

数日後には、その得意先を買収したという会社の社長が、今後の契約の是非を見極める意味も込めて、工場を視察に来るのだという。そしてこの社長こそがポイントなのだと、両親は教えてくれた。

彼は一代で築いた会社を恐ろしい勢いで成長させている凄腕経営者なのだが、かなり个性的でクセの強い人物でもあるのだという。つまりこの社長に気に入られさえすれば、変な人だけに利益度外視で契約を続けてもらえる線もあるかもしれないという話だった。

「だけどな…すごく理不尽な要求をされるか

もしれないってことでもあるんだよ……その社長……良くない噂も色々あつてな……」

「……大丈夫よ……ねえ明隆……お父さんはこんな風にすごく心配してるんだけど……そんな立派な会社の社長さんが、悪い人のわけないと思わない？　そうでしょう？」

「お母さん……」

「だからとにかく、社長さんが視察に来られる日までに、この工場がちよつとでも良いように思ってもらえるよう準備しましょうよ？　お母さん、いっぱい掃除して工場をピカピカにするわ♪」

「……………」

お母さんのその発言がどこかの外れで頓珍漢だということは僕にもわかった。でもお母さんの工場を守りたいという気持ちが嬉しかった。

その思いは、僕も全く同じだったから…。

※※※

それから数日。ついにその日が訪れた。得意先を買収した社長の、工場視察の日。社長は多忙につき、夕方遅くなるという話だった。お父さんからは今日は工場には出るなと言われたけど、この一大事にじつとなどしていられない。なんとか説き伏せ、学校から帰った僕は仕事に入った。

視察を想定して、今日は僕もちゃんと制服の作業着に身を包んでいた。社長はなかなか来なかった。社員さん達も事情を知っているため、みんなどこかそわそわしている気がする。そん

なわけです。正直仕事はあまり捗らなかったけれど、なんとか集中して作業に励んだ。

ひょっとして今日はもう来ないんじゃないかと思い始めた頃、外で社長の到着を待っていたお父さんとお母さんが、工場正面のドアを開けて入ってきた。少し遅れて、件の社長も現れる。傍らには、タイトスカートのビジネススーツ姿の、秘書と思しき眼鏡の若い女性の姿もあった。

社長の姿を一見して、僕は思わずギョツとしてしまった。ちょっと変わった人だとは聞いていた。でもその服装は、想定範囲を優に超えていたのだ。

社長が着ていたのは、濃紺や紫や派手なピンク色を織り交ぜた、毒々しい色彩の異様なスーツだった。それも上下同じ柄である。明らかに悪趣味で、こんな格好で真面目なビジネスの場

に赴いていいものなのかと首を傾げるほどだった。

そして社長自身の外見にも、失礼ながら面食らってしまう。社長はとにかく太っていた。でっぴりと脂肪がついただらしないお腹が、スーツを押しあげて浮き彫りになっている。おまけに成人男性にしては背が低く、頭髪は両脇にわずかばかり残っただけでほぼほぼハゲていた。顔面も醜く、ひしゃげたような形の目鼻はなんとも見苦しい。そして顔自体も無駄な肉がついて異様に丸い。年齢は、見た感じ五十代半ばくらいだろうか…。

ありていにいえば、社長はとても残念な外見をしていたのだった。ところが彼はひどく尊大な様子で葉巻を咥え、値踏みするような視線で工場の内装を見回していた。

「……ゴクッ」

その堂々たる姿になんだか威圧され、僕は唾を飲む…。

「おい、みんな！ちよつと機械止めてくれ！」  
お父さんの言葉に、一同一斉に従う。勿論予期していたので、スムーズなものだった。

「こちら、新しい得意先の新田剛蔵（にったこうぞう）社長さんだ。みんな挨拶して」

『こんばんは！よろしくお願いします！』

練習通り、社員さん達と僕は声を揃えてはきはきと挨拶した。そして礼儀正しく一礼する。  
顔をあげて、社長の反応を待つ。

社長の、第一声は。

「…しかし汚い工場やのお」

そんな失礼極まりないものだった。彼は汚物でも見るみたいに苦々しそうに眉根を寄せ、ぞんざいな態度で工場に辛辣な評価を下したのだった。今日を迎えるにあたって、終業後お母



さんが毎日遅くまで必死に掃除していたというのに…。

「くっ…」

僕は苦虫を嚙み潰さずにはいらなかった。社長は僕達の挨拶には応えず、無遠慮な言動を続けた。

「…こんな汚い工場…一刻もはよう潰してもうた方がええんとちゃうかいな、マジで…こんなもん動かしててもなんぼも儲からんやろ？…ほんで働いてる連中も、能無しっぽいしょうもないおっさんばかりやんか…なんやねん、こいつら…陰気臭いなあホンマに…ん？なんや、この少年は？なんでこんな少年が働いとんのや？」

社長は彼から見て一番手前の機械の前に立つ僕に注目した。自己紹介するべき場面なのだろうけど、僕は蛇に睨まれた蛙のように動けな

かった。社長はそれだけ強い視線で僕を見つめていたのだ。

すかさずお父さんが助け船をだしてくれる。

「ああ。その子は私の息子です。親孝行な子で、学校が終わってからこうして工場を手伝ってくれてるんですよ」

「なんや！息子に仕事手伝わせとんのかいな！平口くん、そらあかで！それは君の経営者としての力のなさを表明してるも同然やで。わしやったら絶対そんなことさせへんもん。そらあ君、こんな潰れかけのしょうもない工場しか経営でけへんわ。君が出世できひん理由がもうそこに詰まっとるがな！なはっ！がははははは！」

「はあ…ははは…」

社長からの明らかな侮辱に対して、お父さんは愛想笑いでやりすごしていたけれど、その頬

が引き攣っているのを僕は見逃さなかった。外見の貧弱さに反してお父さんは男としてのプライドがとても高い。冷や冷やしつつ見守っていると、間を取りなすようにお母さんが言った。「…社長。お時間もあまりないと思いますので、事務所の方へどうぞ。そちらで当工場の業績についてご説明致しますので」

「なはは！ほなそうしましょか！」

一行は正面入り口すぐ横の事務所に入っていった。間もなくまた機械が動きだす。不快な思いをしたはずなのに、社員さん達は文句一つ言わず仕事に戻り、黙々と作業を続けた。

僕もそれに倣い機械に向かったけれど、正直気が気ではなかった。工場の存亡をかけた話し合いがどのようなになっているのか、心配でならなかった。そして当然のことかもしれないけど、それはとても長く続いた。社長達は、一向

に事務所からでてこなかった。

いてもたってもいられず、僕は事務所の中を覗いてみることにした。いけないことだとはわかっている。今関さんにも強い口調で止められた。でも僕は振り切って事務所の前まで行き、そのドアを小さく引いた。

右奥の応接スペースのところで、両親と社長が革のソファーに向き合って座っていた。その様子が、僕には横側から見える形だった。例の眼鏡をかけた秘書の女性は、社長の後ろに恭しく立っている。間のローテーブルには、社長の前にのみ湯飲みと高級そうなお菓子、そして灰皿が置かれていた…。

「そこをなんとか…考え直して頂けませんか…」

「いやいや、無理やわ。こんな工場との契約は打ち切り一択やわ、マジで。…っていうかなん

なん、この経営状況？わしからしたらありえへんで、こんな。わしが責任者やったらもう即刻潰してるで、こんなゴミ工場」

「勿論：仰ることはわかるんです：でも御社との契約を打ち切られてしまうと：：うちはもう立ち行かなくなってしまうんです：家族と：少ないですが社員もいます：彼等の生活のために：」

「いやそんなん知らんって。そんなんわしに言われても困る困る。そんなもん自分でなんとかせなあかんやろ？君も経営者の端くれなんやったら」

「そこをなんとか：出来うる限り：作業も効率化させてコスト削減しますし：そちらからのご要望にも応えるように致しますから：」  
「えゝもうそういう問題ちゃうんか：もう上がり目ないやんかこの工場：：そうやろ？」

「そこをなんとか…」

怒りを封じ込め、お父さんは懸命に交渉している様子だった。だが社長の反応は芳しくない。悠然と葉巻を吸いながらも、有無を言わせぬ感じでお父さんの要求を突っぱねている。彼の経営者としての厳しい一面を見た気がした。やはりただの変人ではないのだ。

工場が、なくなってしまう。いよいよ最悪の事態が現実味を帯びてきて、僕は冷や汗に包まれる。

お父さんの方も譲らず、交渉は膠着状態だった。でもどう考えてもここから好転しそうにはない。それを見かねてか、お父さんの隣に座るお母さんが、ここにきて初めて発言した。

「あ…あの…社長…私からも…少し…よろしいでしょうか？…私のような経営の素人が口を挟むものではないとは思いますが…申し

訳ないですけど…少しだけ…」

「ああ、ええですよ。なんでも言ってください、奥さん」

社長はそういうわけかお母さんには敬語で、至極丁寧な対応だった…。

「ありがとうございます…あの…申しあげた通り…私は経営のことはわかりません…でも…この工場は…本当に良い工場なんです…社員の皆さんも良い人ばかりで…毎日笑顔で仕事をしています…それに息子や娘まで手伝ってくれるんです、この工場のために…こんな工場…他にはないと思います…だからこの工場…是非続けさせて頂きたいんです…色んなことを見直していけば…御社にとってもプラスになることがきつとたくさんあると思いますし…だから…」

お母さんの言葉が、この真剣なビジネスの場

にふさわしくない的外れなものであるということとは、学生の僕にもわかった。申し訳ないけど、正直聞いていて少し恥ずかしかった。

「あはっ！がはははははは！」

案の定、社長に遠慮なく笑われてしまう。  
だが。

「がはは！おもしろい！おもしろいですな、奥さん！こんな場でそんな頓珍漢なこと言うなんて、マジ最高ですよん、あんた！」

社長はお母さんの発言を一笑に付すのではなく、とても嬉しそうな様子で相好を崩していたのだ。

その時僕は以前の両親との会話を思いだしていた。社長は個性的でクセの強い人だから、その社長に気に入られさえすれば、利益度外視で契約を続けてもらえる可能性もあるかもしれない。



ひよっとして、今がまさにその時なのではないだろうか。お母さんは、社長に気に入られたんじゃないのか？

場の空気は明らかに変わっていた。まさかここから、一気に逆転があるのか。祈るような思いで、僕は注視を続けた。

「気に入りましたわ、奥さん。こんな愉快な人に会うの久しぶりです、ホンマ」

社長の言葉に、僕は内心ガッツポーズする。やっぱり思った通りだ。そして念じる。いけ。いけ。このままいけ。

「はあ？…ありがとうございます」

「うん…よし…わかりました…ええですよ…  
契約…続けてあげても」

僕は思わず跳びあがりそうになる。

「ホントですか？わあ！」

お母さんの顔にも、弾けんばかりの歡喜が浮

かぶ。

「ええ。ただし条件があります。契約を続けるには。ええですか？」

「はい。为什么呢？」

お母さんは軽い感じで聞いた。立派な会社の社長さんなのだから、悪い人であるはずがない。以前に語ったその考えを、まるで疑ってみるこ  
となく…。

社長は答えた。

「奥さん……わしの女になってください」

「え…」

お母さんの口から漏れる、間の抜けた小さな  
声……。ドアの隙間から事務所の中を覗き見る僕  
も、同時に凍りついていた。

「え…え…そ…それは…ど…どういう…意味  
…ですか？」

「どういう意味？…わはは！どういう意味や

ろなく？でもあんたもええ歳なんやからまあ大体わかるやろ？なあ？がはははは！」

お母さんに対してだけは何故か丁寧だった社長の口調は、他と同様のぞんざいなものに変わっていた。もう、お母さんを自分のものにしたとでも言わんばかりに…。

社長は説明を続ける。

「わしあんたのこと、マジで気に入ったんや。どっか天然っちゅうか、素っ頓狂でホンマおもしろい女や。よお見たらわし好みの綺麗な顔やし、そんなくたびれたような外見やけど、ホンマは着痩せする結構ええ体してるんやろ？わしぐらい女抱いとな、服の上から見ただけでもそれくらいわかるんや！あんたまだまだイケる口やろ、奥さん！わはははは！」

「くっ…」

社長の下品な言動に、僕は拳を握りしめてい

た。今にも飛びだしていつてしまいそうだった。  
「せやから是非わしの女にしたいんや、あんたを。そんでずっとわしの傍に置いときたい。だからわしの世話係として雇ったるわ。ほんで普段からわしの仕事についてきて、わしの身の回りのお世話をするんや。それがあんたの仕事っちゅうことやな。ちゃんと給料も出るで。まあ秘書でもええんやけどな、秘書はもうここに一人おるし、それにあんたこんな工場で働いとるくらいやから学もなくて頭もどうせアホやろ？多分秘書は務まらんやろ？ははは！ええねんで、アホでもあんたはそれで。それがあんたの魅力やからな。だから代わりに栄誉あるわしの世話係に任命したるわ。喜べ喜べ」

社長は一人で話をどんどん進めていた。その身勝手極まりない態度に、僕は怒りを通り越してもはや呆れていた。お母さんもきつと似たよ

うな心境なのだろう。咄然とした表情で、どこか軽蔑を込めた風の視線を社長にじっと向けている。

悪趣味なド派手柄スーツに身を包んだ、ハゲデブチビの醜男である社長。そんな彼が、正当性のかけらもない話を得意そうに延々続ける様は、滑稽でさえあった。

だが、社長は自信満々でさらに続ける。

「ただし…わしの女になった暁には…おい、希美（のぞみ）。ちよつとこつち来い」

「…はい、社長」

社長は突然、ソファアールの後ろでじっと待機していた秘書の女性を呼んだ。…下の名前で。

「ここに立つんや。よし。ええぞ、希美」

ソファアールに座る自分のすぐ近くに、社長は秘書の女性を立たせた。僕の両親に正面向いた形で。なにが始まるのか。急に不穏な気持ちに苛

まれた僕の視線の先で、社長はとんでもないことをしてみせたのだった。

「わしの女になった暁には…勿論…：仕事中はセクハラありや！うりゃ！」

「きゃっ！！！」

「！！！！！！！」

突然のことに、僕は度肝を抜かれた。社長は秘書の女性のタイトスカートを両手で下から思い切りめくりあげ、そして下半身が丸出しになった状態でその手を固定したのだった。パンストに包まれた総レースの黒下着が、当然まんまと晒され続けることになる。

「ちよっ…やめてください、社長…いや…だめえ…」

「にひひ！こいつもな、秘書として雇ったってるけど実はわしの女なんや。こいつの家めっちゃ借金あったんやけどな、わしの女になること

を条件にそれをわしが肩代わりしてやったつてわけや。なはは。うり！うりうり！」

「きやあん！だ…ダメです…はあ…ホントにやめてください…社長…いやあ…許して…」

「なはは！許さへんでえ♪うり！うりうり！相変わらずええケツしとるなく希美（笑）」  
「いやああん…」

秘書の女性は、豪快にまくりあげられたタイトスカートの裾を懸命に下に戻そうとしていた。だが社長は男の腕力でそれを許さず、あまつさえ露わになったお尻に顔面を押しつけその柔らかな感触を存分に味わおうとしていた。とても気色の悪い光景だった。

顔中を真っ赤に染め、その秘書の女性は本当に嫌そうだった。初対面の僕の両親に下着を見られて、死にそうなほど恥ずかしいに違いない。眼鏡をかけたその大人しそうな外見からし

て、彼女は元々こういう性的なことにはとても不慣れなのだと思われた。それなのに、借金のために涙を飲んでなくなり社長に従っているのだ。彼女にはまるで似合わない露骨にいやらしい黒の下着も、社長の命令で無理矢理つけさせられているのかもしれない。

「……ゴクッ」

社長の傍若無人ぶりに、僕は啞然としていた。ハラスメントに極めて厳しい今の時代に、こんな人間が存在していること自体驚きだった。

「なはは！まあこんな風に、わしの女になったらこれくらいのセクハラは日常的に受け入れてもらうで！……よし、希美。戻ってええで。ありがとうな」

社長は秘書の女性のスカートから手を離した。彼女は慌ててスカートを元に戻し、赤い顔で逃げるようにソファの後ろに回った。



「にひひ…まあでも、その代わり工場の契約の方は任しとけ。責任持つて継続させたるさかい。その条件は、奥さんがわしの女になることや。でも勘違いすんなよ。別に離婚せえとか、家庭捨てて完全にわしのもんになれとか言うとりわけちゃうで。希美と同じように、ただ仕事中はわしの女としてわしの傍にいとけっちゅうことや。仕事が終わったら毎日ちゃんと家にも帰らしたるしな。どや？悪い話やないやろ？」

「…そういうことでしたら…お断りさせて頂きます」

そう返答したのは、しばらく黙っていたお父さんだった。毅然とした態度で、社長の提案を斥けていた。前に社長の話をした時の、お父さんの不安そうな顔が目に残った。お父さんは周囲の噂などから、社長がこういう人物だということをおおらかに始めある程度把握していたの

かもしれない。そして目の前で自分の奥さんのことを好き勝手言われて、お父さんは相当頭にきているに違いなかった。

当然僕もお父さんと同じ気持ちだった。工場はどのようなかわからない。でもそのためにお母さんをこんな奴に差しだすなんて、絶対反対だった。

この社長は、きつと付き合っではいけない類の危険な人間だ。今すぐ縁を切った方がいい。それに工場を救う術は、他にだってあるかもしれないじゃないか。

「ほお：そうか？：ほな君とこの工場との契約：打ち切らせてもろてもええんやな？」

「：結構です：お帰りください」

交渉は破談に向かって滑り落ちていく。この先には、暗い未来が待っているのかもしれない。でも僕は、絶望なんてしていなかった。家族み

んなで力を合わせれば、きっとなんとかなる。

「：そうか：ほなそうさせてもらおうわ：残念やな：」

社長は素っ気ない様子で立ちあがった。

その時。

意外な人物が発言した。

「：待ってください」

お母さんだった。僕は単純に不思議だった。この期に及んで、お母さんになにか言うことなどあるのだろうか。またなにか的外れなことも言うつもりなのか。

お母さんは言った。

「：。。。なります」

「え？」

事務所の中を一人覗き込む僕は、思わず声をだしていた。

「：私。。。社長さんの女になります」

「!!!!!!」

僕は、愕然としていた…。